（本號は四頁）　（郵便信書認可）　明治二十四年十二月廿五日　（定價金二錢）

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり　時事新報には每號詳細なる商況物價の報告あり

時事新報

第三千二百二十一號
明治廿四年十二月廿五日金曜日
舊暦辛卯十一月廿五日（乙酉）
月入午後六時五十分　日入午後四時三十二分
月出午後零時五十四分　日出午前六時零時三十分
滿潮午後零時十六分　干潮午後六時四十九分
（西暦一千八百九十一年）

歲末歲首の廣告

歲末歲首の本紙は臨時部數を增刊するのみあらず一部の紙數を平生に倍蓰するを以て印刷上廣告申込の期日を早めざるを得ず就ては來る三十日以後の時事新報に廣告御掲載相成度方は可成至急御申込被下度左の期日に後れたる廣告の申込は御依頼に應する能はざる事あるべし

三十日の紙上に掲る廣告　申込期日來廿八日迄
三十一日同上　同來廿九日迄
一日同上　同來三十日迄
二日同上　同來三十一日迄

（時事新報は一週一日即ち月曜日に休刊するのみあるに大祭祝日にも休刊する事と思ひ誤れる方あり此の誤解は祭日祝日の多き歲首に際して讀者幷廣告依頼者の爲め特に不都合寡からざれば茲に附記して斯る誤解なからん事を請ふ）

時事新報定價

時事新報は每號八面乃至十二面にして詳細の商況物價報告あり其代價郵送料廣告料は左の如し

一部二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓〇月曜日休刊

〇時事新報社より直接に郵送スルモノハ右定價ノ外ニ一箇月十三錢ヲ郵送料ヲ申受ク

時事新報廣告料（前金）

行五號活字廿四字詰	一日限	一日以上六日迄	七日以上
一行	二錢	十三錢	十錢五厘

本社へ寄稿に付

東京府下を始め各府縣に通信社あるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を賑燒するより各社相一の記事を掲ぐるあと寡からず獨り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社に通信を依頼せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も寡からざれば本社に記事論說を寄稿せんとする方は前段に本社に向け發送あらんことを請ふ

時事新報

震災地方は今正に災害の最中なり

本月十五日震災地よりの來書を見るに震後の災はいよ〳〵ますます甚だしく將來尙は恐る可きものあるが如し書中の大意に

北山地方は北方村より北の方越前界に至るまで凡そ十八里の間、揖斐川節の兩岸に沿ひ山も谷も悉く崩壞して其土砂は恰も山腹に懸り落ちんと欲して未だ落ちざるものあり既に落ちて河床を埋めたるものあり數百箇所の多き逐一計ふるに遑あらず此有樣にて一雨出水の事もあらば土砂は悉く下流に押流されて北方村より以南の揖斐川筋は忽ち川床を高めて其高さは堤防の上に出で水は堤外に溢るゝ外に路なかるべし

右の大節にて兩岸の山々に牛殘りたる樹木も悉く倒れて山は一面の禿山となり道路も斷絶して人の往來も絶えたる樣なり

（以下二段目）

おれば二斗位の米を負ふて僅に往來したれども十一月二十七日より引續き雪の爲めに土砂を落し今日の處にては北方村以北は先づ不通の姿となり同村より東横山まで凡そ五里の間にても往來頗る難澁を極め夫れより又北の方十餘里間は人間の歩を進む可らず口山の處にても樫原村などは既に米麥食鹽の缺乏を告げ貧富の別なく餓死に迫る有樣にて郡役所警察所にては專ら救濟の計畫最中なり吾々は今日まで北山地方に左程の被害あらんとは思はざりしに右の報告に接して唯驚くのみ

又揖斐川の水源に當る德山村は山の入口より十餘里の奥に在るゆゑ必ず無難あらんと思ひ居りしに昨今の報知に據れば同村の内大字塚村は戶數三十戶の處雪の爲めに山嶽崩壞して二十六戶の人も家も地下に埋沒し他の村々も手少の害を被りたるよし

又揖斐川の流水は赤く濁りて濁水と云ふよりも泥水と申して然る可し斯く泥水を押流す中には泥は自然に河底に沈澱するの外なし杉野村邊の舟子の申す處を聞くに地震後今日に至るまで河底の埋まるみと三寸乃至五寸なりと云ふ通常の流水にて既に斯の如し一朝洪水の變もあらば如何ある大災害を致す可きやとて沿岸の村々は來春後の事を豫想して恐れざる者あるし云々

右は去る十五日附の書翰にして書中の所記唯人の心を寒からしむるのみ爾後又聞く所に據れば從前桑名の海口より揖斐川へ潮水の上るゆゑ凡そ四里半ばかりのものが地震後は上流七里の處にまで干滿を感ずるみとになりしと云ふ固より精密に測量したるものにはあらざれども潮水の上流に上るゆゑ遠きは地盤の下りし徵候ありとて恐るゝ者多し若しも今度の地震にて濃州の平原一面に地盤の低落せしみともあらんには左なきだも常に排水に難澁する地方が更に其地盤を低くしたりとあれば實に容易あらざる出來事なり

又古來の口碑傳說に徵するに揖斐の川筋は凡そ二百年毎に一變するの例にして河底に土砂を埋めて次第に淺くなれば隨て兩岸の土堤を高くして水の溢るゝを防ぎ天然の土砂と人工の堤防と恰も互に競爭して河心の勢命を維持し遂に人力の及ばざるに至りて大破裂と爲りて水は最低地を求めて新に河流を成す其間凡そ二百年あり今の揖斐川は既に四百年を經て正しく一倍の壽命を重ねたるものなれば平常の有樣にても隨分危險なる癖は其上に前に云へる水源の山嶽崩壞とありては四百年の老大川その終に臨んで如何ある大變を生ず可きや兎に角に地方の運不運は來年の雪解けと暴雨の時節とを待て始めて知る可きのみ

以上は單に揖斐川に關する報知あれども此他の二大川木曾長良を始めとして幾多の大小河流は何れも大同小異の有樣なる可し我々が都會の地に居て安らかに眠食すればみを左まで苦せざれども試に我身を岐阜大垣に置て想像を巡らしたらば如何ある可きや死者は未だ葬らず負傷者は未だ癒えず幸に死傷をば免かれても身外無一物にして今日の生活に苦しむ尙は其上に今年の雪、來年の雨を思へば身は焦せく水の底に居るに異あらず凡そ人生に不幸多しと雖も其不幸の殘酷にして區域廣く且つ安心を得ること容易ならざるみと震災地方民の如きは未だ曾て聞見せざる所あり遇ま來我輩は每度罹災者に面會して其物語りを聞く每に落涙自から禁ずる能はず斷腸消魂果ては唯獸して無言に止むのみ人誰れか惻隱の心なからんや此心ありながら他を度外視するは畢竟事の實際を詳にせざるに坐する者なれば我輩の願ふ所は政府を始めとして國會の議員も民間の有志者も姑く政治上の私情を去て同胞の不幸を憐み其不幸の中にも聊か安心を得せしむるの工風ありたきみとなり其筒條に就ては追〳〵論ずる所ある可けれども理窟の議論は後にして先づ人々の至情に訴へんが爲め聊か爰に一言するものあり

雜報

○小澤男爵免職に就ての質問書　貴族院議員山川浩氏は制規の贊成を得て左の質問書を提出したり

貴族院議員男爵小澤武雄去る十六日願ひに依り陸軍中將を免せられたり然るに新聞紙に本月十四日本院議場に於ての發言に關係したりと記載す數日を經るも未だ正誤を見ず然らば新聞の報告信すべきに似たり國務大臣の上奏は孰れの點に之ありや右議院法第四十八條に依り政府に對し及質問候也

明治二十四年十二月二十三日

質問者　山川浩

贊成者

三浦安　伊東巳代治　渡正元
青山眞　田中芳男　堀眞五郎
五十嵐敬止　谷干城　日野西光善
曾我祐準　近衛篤麿　長谷川貞陸
松平乘承　佐竹義理　蜂須賀茂韶
久世通章　內藤政挺　五條爲榮
柳原前光　本多副元　小笠原長生
稲取業彥　本多正元　鳥尾小彌太
稲倉勝達　小笠原長行　竹內惟忠
松本信正

○微兵令改正案に對する委員會の議決　衆議院議員天野三郎氏は現役兵の服役期限（三ヶ年）を二ヶ年に改めんとの改正法案を同院に提出し特別委員は夫々審査の上一昨日午前の委員會に於て終に此の改正案を否決したりと云ふ尤も同委員會に於て其確定議の採決をなす時には否とする者〳〵人數、可とするものより僅に一名多かりし爲め天野氏の案を否決せしもの故委員會の報告書と共に改正案贊成派の委員は原案を可とする旨の意見書を提出するおらんといふ

○宮城縣有志家の運動　高等中學校廢止案衆議院にてたりとの報に接して宮城縣各町村の有志家は大に狼狽し同縣知事に意見書を呈するもあれば主務省に向て具申書を呈せんとするもありて熱心に協議中なるが其故は同地に於ける第二高等中學校創立の際に知事より永年設置の旨趣を以て人民を說諭し其建築費として殆んと十萬圓の金額を支出せしめたるに開校以來未だ數箇月あらざるに今更廢止の不幸に逢はゞ同地人民の失望云はん方なかるべしと云ふにあるよし

○滋賀縣會終に中止せらる　去る二十二日滋賀縣會を開くや兼て意根の有志者俠客百餘名は大津に入り込み議會開會前隊伍を整へ示威運動を爲し夫れより傍聽に出掛けたれば大津の俠客乾兒數百名は大に憤激して種々の手配を爲し其他壯士有志家等孰れも傍聽席に詰懸けたるより警官は非常を戒め午前十時三十分開會し縣參事會の議決取消の事を議するや傍聽席より賛否の聲交々起り議場騷然たりしが議員さんとするの機察あるより反對氣と稱して退場し門外に出でゝ客風の男は突然横田氏を目掛けより横田氏は辛ふして之を逃れたり午後引續き開議し遂に議決して可決するや否や番外一番寺田府縣會規則第三十三條に依り府縣知事大鳥享と朝議し茲に同縣

○軍艦の發著　軍艦館山は去る高雄は同日品海へ投錨、同風類墨二十三日別府へ向け同所を抜日宇品より吳港へ廻航せり

○佛國に於る天長節祝賀　在佛る十一月三日天長節祝賀のため留本邦人五十名を招き各々充分し旨同國駐劄野村特命全權公使一兩日前其筋へ電報ありしと

○騎兵監佐野少將　は教導團騎兵高雄に同日出發せり

○水難義濟の慈善音樂會　は去り鹿鳴館に於て開會し式部職樂州樂演奏、東京音樂學校生徒の彈奏、梅園社中の清樂、山勢松韻氏等が胡弓三味線に合したるあとは最も滿場の喝采を閉會は十一時近き頃ありしと

○辭職教員の繼續授業　宮城縣校の教員諸氏は一旦總辭職を爲し父兄等より卒業の間際に至り半不幸を訴へて已まざるより教員其依囑に應じ再び授業を爲すに

○有功章贈與　大日本水產會々郎、野崎武吉郎、馬場道久及び衆氏に一兩日の內同社の有功章を

○慰勞金附與　鎮臺にては一十三名を招喚して本年コレラ病勞として金若干圓宛を附與せり

○東雲新聞の廢刊と大坂曙新聞　は今度諸機械類を公賣して廢同新聞社員たりし門野又藏氏等者横溝小八氏外數名に計り西成より大坂曙新聞と云ふ自由主義より發刊するよしあり

○瑞西の時計製造業　世に有名は專ら同國の西部即ち佛國に近に盛んにしてゼネヴァ、ヴォーびベルニース　ジュラの四地方に從事するもの數千戶あり就中方の如きは險しき山の奥、谷の家々に之を營まざるものあるし元伏して產物に乏しき貧地あれば民の詰り傳へて安樂を求ひるの一事のみなりしが過る十八世